

王城の舞踏会は、今宵も盛況だった。

煌びやかなシャンデリアの下、貴族たちが優雅に踊り、笑い声が絶えない。

その華やかな空間の片隅で、私はお兄様の隣に立っていた。

グレン・フォン・シュヴァルツ。

プラチナブロンドの髪に、琥珀色の瞳。白い軍服に身を包んだその人は、相変わらず無表情で、誰にも興味がなさそうに宙を見つめている。

お兄様と呼んではいるけれど、血の繋がりはない。

幼い頃、私はシュヴァルツ家に預けられた。五つ年上のこの人をずっと「お兄様」と慕って、十五年を過ごしてきた。

——それが三ヶ月前、政略結婚で私の夫になったのである。

「公爵、先日の戦勝、改めてお祝い申し上げます」

「……感謝する」

話しかけてきた貴族相手に、お兄様は短く答える。それ以上の言葉はない。

相手は一瞬間を持って余してから、私に軽く会釈して去っていった。
(……またお兄様だったら。いつもこうなんだから)

お兄様は最低限の礼儀は守るけれど、それ以上の会話を自らしよ
うとはしない。社交辞令も、お世辞も、必要以上のことは一切言わ
ない。

私もそんなお兄様のことはよく知っている。だって、ずっと側で
見てきたから。

——初めてお兄様に会った日のことを、今でもよく覚えていてる。

五歳の私は、知らない屋敷に預けられることになった。

父も母もいない。知ってる人が誰もいない場所に連れられて、子どもながらにひどく不安に感じていたのだ。

庭の隅でしゃがみ込んでこっそり泣いていたら、影が差した。

「……泣くな」

顔を上げると、金色に光る髪の毛の子が立っていた。

(……きれい)

その感想がお兄様のお顔立ちに対してなのか、光を反射してキラキラ輝いていた髪色に対してなのか、今となってはそこまではよく覚えていない。

それでも、王子様みたいだと思って、胸が高鳴ったことだけは記憶に残っている。

けれど、その子どもらしいときめきも、すぐにどこかへ飛んでいつてしまった。

お兄様は当時十歳くらいだったけれど、眉間に皺を寄せて、それはもう面倒くさそうな表情で私を見下ろしていたのだから。

「あまり泣いているとうるさいだろう」

そう冷たく言われて、恐ろしくて悲しくてもっと涙が溢れ出した。

「……っ」

お兄様は一瞬しまったといった表情を見せたが、すぐにまた眉根を寄せる。

そして、何も言わずに隣にしゃがみ込んで、ぽん、と頭に手を置いた。

乱暴じゃなくて、でも優しくもなく。ただ、私が泣き止むまでそこにいてくれた。

ぽん、ぽん、と頭を撫でるあたたかい手のぬくもりに、私はいつの間にか泣き止んでいた。

泣き疲れてようやく顔を上げたら、その綺麗な男の子はあいかわらず不機嫌そうな顔をしていた。けれど、もう怖くはなかった。

「……泣き止んだか」

「……うん」

「……」

「……」

「……腹、減ってないか」

「……うーん」

泣きすぎて、あまり空腹を感じなかった。それを正直に伝えたものかと悩んでいると、不意に男の子の表情が少しだけ和らいだ。

「グレンだ」

「……え？」

「俺の名前。……お前は」

私が名前を告げると、その子は何も言わず、また無表情のまま立ち上がった。

「減っていようといまいと食事の時間だ。来い」

差し出された手におずおず自身の手を重ねる。

握り返してくれた手は、やっぱり温かくてやさしかった。

——それから十五年。

お兄様はいつも私の側にいてくれた。

転んで膝を擦りむいた時には、黙って薬を塗ってくれたし、他の子どもに嫌がらせをされた時には、睨みつけて追いつけてくれた。

夜、両親が恋しくて眠れない時には、私の隣に来て手を握って
てくれたりもした——私が眠るまで、ずっと。

言葉は少ないけれど、お兄様はいつだって優しくて、私を守って
くれた。

私にとってこの人は、手を差し伸べてくれたあの日からずっと

——兄のような存在だった。

血は繋がっていないけれど、誰よりも近くて、誰よりも大切な人。
それが三ヶ月前、その関係性は大きく変わる事となった。

「——シュヴァルツ公爵家の次期当主として、俺は妻を娶らなけれ
ばならない」

ある日、お兄様に突然そう告げられた。

私はお兄様の言葉に少なからずショックを受けた。

仕方のないこととはいえ、お兄様の隣に知らない女性が立つのを

想像したら、胸の奥がぎゅっと締まった。

けれど、結婚しないで……なんて言葉は間違っても口に出してはいけない。そう思つて堪えていると――

「だから、お前が俺の妻になれ」

お兄様は何でもないことのようにそう告げた。私は突然の言葉に、頭が真っ白になった。

(……私がお兄様の妻になる……?)

兄妹のように育つた私たちが、夫婦になる。

嫌ではなかった。

誰かがお兄様の妻となるかと思つた時の感情は、兄を取られたくない妹の独占欲みたいなものだったが――

それでも、それが現実になるより、そして、私が他の知らない人に嫁ぐより、ずっといいと思つた。

だって、お兄様となら私はいつだって安心できるのだから。

でも——ふと思つた。

(……お兄様は、どう思っているんだろう?)

私に告げた時のお兄様はまるで無表情だった。

嬉しそうでも、嫌そうでもなく。それしか選択肢はないとでもいうように。

家のために必要だから、妻にするだけ。

きっと、お兄様は私のことを一人の女性として見ていないのだろう。

だから、夫婦になつても、何も変わらない。

会話はする。食事も共にする。けれど、私たちの間には、夜の関係はなかつた。

それがお兄様と私にとっては普通のことだった。だって私たちは、

兄妹みたいなものなのだから。

「奥方様」

声をかけられて、私は物思いから引き戻された。

振り返ると、社交界でも名の知れた令嬢が扇子の向こうで微笑んでいる。

「旦那様とは、仲睦まじくていらっしやいますわね」

「ええ、まあ……」

私は曖昧に笑う。仲睦まじい、という表現が正しいのか分からない。

「羨ましいですわ。グレン様は文武両道、若くして將軍位を得られ

たこの国の英雄で、おまけにあのお顔立ち」

令嬢の視線が、少し離れた場所に立つお兄様に向けられる。

プラチナブロンドの髪に、彫りの深い顔立ち。白い軍服が映える
広い肩。

確かに、お兄様は美しい。氷の貴公子、と社交界では囁かれています。
らしい。

(……自慢のお兄様ですもの)

褒められて悪い気はしない。

「……狙っている女性は山ほどいらっしやいますのに、グレン様が
選んだのは貴女ですもの」

「……そうですね」

選んだ、という言葉に違和感を覚える。

違う。選んだんじゃない。家同士が決めたことだ。

「愛されていていらっしやるんですのね」

その言葉に、胸がざわついた。

(……愛されている?)

違う。お兄様にとって私は——妹みたいなものだ。

愛とか恋とか、そういうのじゃない。

「……ええ」

けれど、それをここで主張するのもおかしな話だと思い、私は曖昧に笑って、誤魔化した。

舞踏会も終盤、私は露台で一人、夜風に当たっていた。社交辞令の笑顔を振り撒くことに少し疲れていた。

けれど、それ以上に――

『愛されていらっしやるんですのね』

さつきの令嬢の言葉が、頭から離れない。

この結婚に、愛なんてない。お兄様は私を妹みたいに思ってる。

(……だから三ヶ月経っても、触れてもこないんだわ)

別に傷つく必要なんてない。私だってお兄様とそういう関係になりたいだなんて思っていない。お兄様はお兄様なんだから。

でも――

先ほどの令嬢の言葉を思い出すと、胸の奥がちくりと痛んだ。

「……ここにいたのか」

低い声に振り返ると、お兄様が立っていた。

月明かりに照らされたプラチナブロンドが、銀色に光っている。

琥珀の瞳は相変わらず何を考えているか分からない。

「帰るぞ。馬車を回した」

「……ええ、お兄様」

「……」

お兄様の目が、一瞬だけ細くなった。

でもすぐにいつもの無表情に戻って、私の手を取った。

大きくて、温かい手。

昔から変わらない。

私を泣き止ませてくれた、あの時と同じ手。

——別に妹で……このまま何も変わらなくてもいい。

そう思いながら、私はその手に導かれて歩き出した。

馬車に乗り込み、向かい合わせに座る。

沈黙が降りた。

いつものことだ。お兄様は元々無口だし、私もこの静かな空気が嫌いではない。

(……甘い雰囲気なんてこれっぽっちもないもの)

窓の外を流れる夜景を見ると、どうしてもさっきの令嬢の言葉を思い出してしまう。

でも、もし——と、考えることを止められない。

(もし、お兄様が私を女として見てくれていたら……?)

そんな浅はかな考えが浮かんで、慌てて打ち消した。

そう考えてしまうこと自体が罪なように感じてしまう。

「……何を考えてる」

お兄様の声に顔を上げた。

琥珀の瞳が、じっと私を見ている。

「いえ、何も……」

「嘘だな」

「……っ」

「さっきから上の空だ。何があった」

この人は昔からそうだ。言葉は少ないのに、私のことだけはよく見ている。

「……さっき、とある令嬢に言われたの」

「何を」

「愛されてるんですね、って」

「……」

「あ、あの、私だってちゃんとおかしいってわかっているの。私たち、兄妹みたいなものなのにな」

慌てて付け足すと、お兄様の目がわずかに見開かれた。

「……それで？」

「それで、って……」

私は言葉を探した。

言っているのか分からない。でも、ずっと心に引っかかっていたことが、口について出てきてしまった。

「お兄様は昔から私の面倒を見てくれてただけなもの……」

お兄様の顔を見るのが怖い。きつと、急に何を言い出したんだと呆れているだろう。返事を聞くことさえ恐ろしくなって、私は早口で続ける。

「私もお兄様としか思えなくて……だから——愛とかそういうんじゃないもの」

言い切ってしまった。

胸の奥がずきんと痛んだけれど、今更取り消せない。これが事実なのだ、そう思い込むしかないのだ。

「……待て」

低い声が、私の言葉を遮った。馬車の中の空気が、凍った。

「……妹？お前が俺の？」

「え……」

「兄としてしか見れない。愛じゃない。……俺のことをそう思ってる？」

「だって、実際そうじゃない。小さい頃からずっと一緒に、兄妹みたいに育って——」

「黙れ」

お兄様の目が、変わっていた。

いつもの無表情じゃない。静かに燃えるような、私を射抜くよう

な冷たい目。

(……怒ってる……? でも……どうして?)

「俺が……お前の兄だと?」

「お兄様……?」

「いつまでそんなことを言っている」

お兄様が、向かいの座席から腰を浮かせた。

狭い馬車の中、一歩で距離が詰まる。

私の隣に座り直したかと思うと、顎を掴まれた。

「……っ」

無理やり顔を向けさせられる。

琥珀の瞳が、至近距離で私を射抜いていた。

(……怖い)

今までこんなお兄様を見たことがない。

いつも無表情で、冷静なお兄様が、こんなに感情を剥き出しにしているなんて。

「……昔は、そうだったかもな」

低い声が、鼓膜を震わせた。

「お前が泣いてたら守ってやりたかった。それは本当だ」

「……」

「だが、いつからか——守りたいだけじゃ済まなくなった」

グレンの声が、低くなった。

「……なぜ自分が妻に選ばれたと思う」

「え……」

「家同士の都合だと思ったか？他に適任がいなかったと？」

「だって……実際、そう……」

「違う」

顎を掴む手に、わずかに力がこもった。

「俺が頭を下げたんだ。お前を妻にしたいと。他の誰にも渡せない
と」

息が止まった。お兄様の言葉がうまく頭に入ってこなくて、ただただ心臓が激しく脈打っている。

(……お兄様が、頭を下げた？ 私のために？ どうして？)

「三ヶ月。手を出さないと決めていた」

「……どう、して……」

「……お前が大切だった」

「……っ」

「……なのに、俺はお前にとって兄以外にはなれないのか」

(……お兄様が……私を……?)

にわかには信じられなかった。だって、この三ヶ月間そんな素振

りは一切なかったのだから。

「……急にそんな……」

「急に？三ヶ月も待ってやったんだ。もう十分だろう？」

三ヶ月。

一度も触れてこなかったのは、私を女として見ていないからだと——そう、思っていたのに。

「……俺が怖いか」

「……っ」

震える頬に、大きな手が添えられた。

幼い頃、泣いていた私の頭を撫でてくれた——お兄様の手だ。

「……どう思おうと、お前は俺の妻だ」

顎を掴んだまま、グレンの顔が近づいてくる。

琥珀の瞳が、すぐそこにある。吐息がかかるほどの距離。

「それを今日、じっくりと体に教え込んでやる」

（——え）

唇を、奪われた。

一瞬、何が起きたかわからなかった。

柔らかくて、熱い。グレンの唇が、私の唇に重なっている。

（キス……してる……お兄様と……）

十五年、隣にいた人。頭を撫でてくれた手。不器用な優しさ。

その人が今、私の唇を奪っている。

硬直している私をよそに、グレンの舌が唇の合わせ目をなぞった。

「んっ……」

驚いて唇が開いた瞬間、中に入ってきた。

舌が、絡め取られる。

「ん……っ、ふ、ん……♡」

息ができない。頭がくらくらする。

（お兄様と、こんな——）

信じられない。夢を見ているみたいだ。

でも、唇に感じる熱さは本物で、絡みつく舌の感触も本物で。

「っは……あ、ふ……っ♡お兄さ——」

グレンの唇が、止まった。

「……その呼び方が気に食わない」

声が低い。さっきまでのキスの熱とは違う、冷たい温度。

「俺はお前の何だ？」

琥珀の瞳が、真っ直ぐに私を見ている。

——息が、できなかつた。

「兄じゃない。俺はお前の夫だろうか？」

「……っ」

頭が追いつかない。

ずっとお兄様だったこの人が、こんな顔で、こんな声で――

「……名前で呼べ」

「……ぐ、れん……」

「……っ、もう一度」

「グレン……」

お兄様の目が、一瞬だけ揺れた。

きつく結ばれていた唇が、わずかに緩む。

(名前を呼んだだけで、こんな顔するんだ……)

でもそれは一瞬のことだった。

すぐにまた唇を塞がれる。さつきより深く、貪るように。

「んっ……♡ふ、あ……っ♡」

舌が絡みつく。息ができない。

キスの合間に、お兄様の手が背中を滑り落ちていく。

腰に触れて、そのまま——ドレスの裾を掴まれた。

「っ……っ♡ま、待っ——」

「もう十分待ったと言っただろう」

お兄様の手が、ドレスの上から胸を包み込んだ。

「んっ……っ♡」

布越しなのに、手のひらの熱がはっきりと伝わってくる。

大きな手が、形を確かめるようにゆっくりと揉み込んでいく。

くにゅ♡くにゅくにゅ♡

「あ……っ♡んんっ……っ♡」

「……ずっと触りたかった」

親指が先端を探り当てて、布ごと押し潰すように擦られた。

すり♡すりすり♡

「ひゃっ♡やっ……服の上からなのに……っ♡」

「……脱がせたい」

低い声に、切実な響きがあった。

けれどドレスは背中中の編み上げで留められていて、この狭い馬車の中では到底外せない。

お兄様の指が、もどかしそうに布の上から先端を転がした。

くり♡くりくり♡

「んんっ……♡あっ……♡」

それが限界だったのだろう。

舌打ちとも溜息ともつかない吐息を漏らして、お兄様の手が胸を離れた。

代わりに、スカートの裾を掴まれる。そのままたくし上げられて、太ももが夜気に晒された。

「やっ……っ♡」

温かい手のひらが、太ももの内側にそっと添えられた。
膝から少しずつ上へ、なぞるように滑っていく。

すう……っ♡すう……っ♡

「ん……っ♡」

指先が触れているのはほんの僅かな面積なのに、肌の奥までじんと痺れるような感覚が走る。

ゆっくりと、焦らすように上がっていく。膝裏、太ももの真ん中、そして付け根の場で——止まる。

「……柔らかいな」

ぐ、と太ももを掴まれた。跡が残りそうなほど、指が深く食い込む。

「っ……っ♡」

お兄様の息が、荒くなっていた。

「……………」

何か切れたような、短い沈黙。

次の瞬間、お兄様が膝をついていた。

狭い座席の間に身体をねじ込むようにして、スカートの中に顔を埋めてくる。

「ちよっ……………何してっ——ひあっ♡」

下着越しに、熱い舌が押し当てられた。

「んっ、ひっ……………♡やっ……………そんなところ……………っ♡」

信じられない。

お兄様が、こんなことを——

(やだ……………なのに、力が入らない……………っ)

「こんなことをされて、まだ兄だと思っているのか」

スカートの中から、くぐもった声が聞こえる。

「……答えなくていい。体に直接聞いてやる」

下着をずらされ、お兄様の舌が直接敏感な部分に触れる。

ぴちゃっ♡れろっ♡

「んう♡」

(なっ……お兄様が、私の、舐めて……っ)

れろ♡れろ♡れろれろ♡れろれろ♡

「んっ……、ああっ、ん……♡」

激しく舐め回されて、頭の中がぐちゃぐちゃになっていく。

「気持ちいいのか？」

「ん、わか、んな……♡」

れろれろ♡ちゅぱちゅぱ♡

「わからない？中からどんどんいやらしい汁が溢れてくるぞ」

「んっ、ふ……あ……っ♡だ、だっ……♡」

「……あまり声を出すと御者に聞こえるぞ」

(御者……っ!?)

その言葉にハツとなる。馬車の外には、御者がいる。こんな声、聞かれたら――

「やっ……だめ……っ♡きこ、えちや……っ♡」

「……声を出さなければいい」

(……そんな……)

舌が、入り口をゆつくりとなぞった。

じゆる♡くちゅ♡じゆるる♡♡

「ひゅっ……♡ふああ……♡」

焦らすように、ゆつくりと。

けれど、馬車が揺れるたびに、舌の当たる場所がズレていく。

れろれろ♡れろれろ♡れろれろ♡れろれろ♡

(んん♡なんだかもどかしい……♡♡)

一番触れてほしい場所を、わざと避けるように舌が動く。たまに掠めるだけで、すぐに離れていってしまうのだ。

「ここ、舐めて欲しいのか？さっきから腰が動いている」

(……私ったら、お兄様の舌を追うように腰を動かしてしまつて……)

くりっ♡♡

「……っ♡」

指先が私の突起に触れて、身体がビクンと揺れる。すり♡すり♡と焦らすように撫でられて、お腹の奥がじいんと熱をもつ。

「……お前も、俺が焦らされた気持ちを知れ」

「え……っ♡」

「俺は三ヶ月、毎晩こうしてお前のここを味わいたいと我慢してきてんだぞ」

ちゅっ♡ちゅぱっ♡♡

「ふぁ……あっ、ん……っ♡」

「お前に触れたかった。この中に、ずっと入りたかった」
れろれろ♡くちゅくちゅ♡

「んんっ……♡」

（お兄様が……三ヶ月、ずっとそんなことを……）

知らなかった。隣にいたのに、そんなこと、全く――

ぢゅううっ♡♡

「ひゃあっ♡♡」

急に強く吸い上げられて、甘い声が漏れた。

慌てて口を噤もうとするけれど、お兄様の舌は容赦がない。

さっきまでの焦らしが嘘みたいに、一番敏感なところを集中的に攻められる。

ちろちろ♡ぢゅう♡ぢゅう♡

「あっ♡やっ♡あっ、あっ♡」

お腹の奥にきゅうつと甘い塊が膨らんでいく。もう少し、もう少しで何かに届きそうで――

「お兄――っ」

そう口にした途端、舌が止まった。

「…………♡」

一切の動きがなくなった。吐息すら感じない。

さっきまで積み上がったいた熱が、行き場を失って身体の中でぐるぐる渦を巻いている。

「あ…………♡なん、で…………♡」

腰がまた勝手にお兄様の顔を追いかけようとして、自分で自分に驚いた。

「…………お前は、まだ兄と呼ぶのか？」

(…………私、いつもの癖で…………っ)

「…………っ、ごめんなさい…………っ♡」

「…………お前の夫の名前は何だ」

「…………グレ、ン…………っ♡グレン♡」

「…………いい子だ。もう二度と間違えるな」

ぢゅううううっ♡♡

ご褒美のように、ヒリヒリするところを強く吸われた。

「ひゃああっ♡♡んっ、ふあっ、ああっ♡♡」

(名前を呼んだら、ご褒美…………♡♡)

まるで舐けられているみたいだ。身体がグレンの舌に従わされて

いく。

っ♡♡♡っ♡♡♡っ♡♡♡くりくりっ♡♡♡

「やあっ……♡♡♡そこっ、へんに、なるっ……♡♡♡」

(何、これ……っ♡♡♡舌で突かれると、お腹の奥が、きゅって……

っ♡♡♡)

自分で触ったこともないような場所を、グレンの舌が暴いていく。
私の知らない私の身体を、この人がどんどん見つけていく。

(それがこんなにも嬉しいなんて……♡♡♡)

自分でも自分の感情がよくわからない。

何度も何度も、同じ場所を舐められて、今はただ溶けてしまいうだった。

ちゅっ♡♡♡ちゅるっ♡♡♡ちゅうっ♡♡♡

「んあっ♡♡♡やあっ♡♡♡だめっ、そこばっかりい……っ♡♡♡」

太ももが震える。知らず知らず腰が浮いてくる。

逃れようと身を振ると、グレンの腕が太ももの下に回り込んで、腰ごと引き寄せられた。

(んん♡逃げられない……♡♡)

「グ、レンっ……♡♡グレンっ、グレンっ……♡♡」

名前を呼ぶと、舌の動きが激しくなった。

じゅるっ♡♡くちゅくちゅっ♡♡

「ふあああっ……♡♡あっ、なにか、くるっ……♡♡」

お腹の奥が、きゅうつと締まる。

何か来る。分からないけど、何か――

(何、これ……っ、こわい、でも、とまんない……っ♡♡♡♡)

「っ……♡♡なんか、からだがつ……勝手にっ……♡♡」

「……いきそうなんだろ」

「いく……?」

「すぐわかる」

ちゆるるっ♡♡♡じゆるうっ♡♡♡

「あっ♡♡♡むりっ、むりっ……♡♡♡」

グレンの舌から逃れたいのに、脚に回された腕のせいで、それができない。

逃げ場を失った快感が、お腹の奥にどんどん溜まっていく。

ちゆるるっ♡♡♡じゆるうっ♡♡♡

れろれろっ♡♡♡ぢゅうううぐっ♡♡♡

「——っ♡♡♡ひあっ、あっ、あああっ♡♡♡」

声にならない悲鳴が漏れた。

びくっ♡♡♡びくびくっ♡♡♡

頭の中が真っ白になった。何も考えられない。身体が勝手にびく

びくと跳ねて、グレンの顔を太ももで挟んでしまう。

「ひっ……♡♡♡ひうっ……♡♡♡あ、ああ……っ♡♡♡♡♡」

波が引くまで、グレンはずっと舌を動かし続けていた。

余韻を拾うように、優しく、ゆっくりと。

「はあっ……はあっ……♡」

息が整わない。

(……今の、が……いくつて、こと……?♡)

生まれて初めての感覚だった。

グレンがスカートの中から顔を上げた。

唇が、濡れている。

「……っ」

(私ので……グレンの唇が……っ)

なのにグレンは、口元を拭おうともしない。

まだ潤んだままの目で私を見上げて、濡れた唇の端をわずかに持ち上げた。

「クリトリスだけでイけたな」

「くりとりす……♡」

聞き慣れない言葉を、ぼんやりと繰り返してしまふ。

（さつきからずっと舐められてた、あそこの名前……）

「まだ終わりじゃない」

「え——」

グレンの指が、まだ濡れている秘所に触れた。

「ひあっ♡」

「もうすっかりトロトロだな。これだけ濡れていれば大丈夫だろう」

ぬるっ♡ぬるっ♡